アジアの工業化と

本書は、著者がこれまでタイに関して実施してきた研究の集大成ともいえる著作となっている。著者は、タイにおけるJICA（国際協力事業団）のプロジェクトでタイに三年間の滞在経験を有するなど、タイ研究に関しては豊富な経験と実績を残している。したがって、本書における分析対象はかなり包括的なものとなっている。

具体的な構成は次のようになっている。まず、第一章で農業・農協問題の論点整理をし、第二章でタイの工業化について検討している。その際に韓国との比較を通じて、タイを出稼ぎ農民型と位置づけている。そのうえで、第三章で農業問題に分析を進めている。

第三章の第一節でタイ農業の特徴を概観した後で、第二節で輸出米主産地である中部平原地帯の生産基盤の変化について言及している。さらに、第三節では農業関連産業、いわゆるアグリビジネスを取り上げている。タイは、農業を基盤とする工業化戦略を推し進めてきたが、その代表がタイの主要輸出作物である米と近年成長が著しい

エビ産業である。そのなかから、米については精米業者を、エビについてはタイを代表する農業関連企業であるC.P.(チャロン・ポカパーン)を取り上げ、分析を行っている。特に、C.P.に関してはかなり突っ込んだ分析が行われている。

以上のように、第一章から第三章までに、タイの経済及び農業に関する基本的かつ全体的な分析をおこない、第四章でタイにおける農業協同組合の歴史的経過と現状についてまとめた後に、第五章で最終的なまとめとして、途上国経済における自立化と協

『アジアの工業化と

農業・食糧・環境の変化』

山本博史著（筑波書房社）

同組合の役割について総括している。

本書の主なテーマは、途上国の経済発展、特に貧困の解消に協同組合という手法の適用可能性にあると考えられる。具体的にいえば、上からの組織化が中心であるアジアにおいて、下からの自発的な農協の組織化の可能性、手法である。

著者も指摘しているように、農協は資金的な脆弱性という構造的問題を抱えており、これが経済事業その他の農協の活動を制約している。特に、米の集荷において、集荷金不足のために集荷商人と対抗して米の販

売取扱量を増やせないというのは、タイの農業を考える際には、致命的ですらある。

さらにいえば、農協が資金のかんりの部分を国の農業・農協銀行(BACC)に依存している点が、大きな問題であるという。特に、BACCが零細農家層の排除、農協組織の軽視という傾向を強めているだけに、農協が貧困撲滅に貢献できる余地は、現状の体制のままではかなり厳しい。

そこで、著者が参加した農協振興プロジェクトが紹介されている。貧困地域である東北部で、下からの自主的な農協の設立を

目標として開始されたプロジェクトだが、おそらくこれからの重要な実験のひとつになると考えられる。著者も述べているように、初歩的な小さな萌芽であるかもしれないが、ひとつの可能性として今後の発展に期待したい。

本書は、アジア農業及びアジアの協同組合を理解するうえで格好の著書であり、一読を薦めたい。

(一九九九年二月、百八十九頁、一、九〇〇円)
(大江徹男)